



大正御殿跡・首里旧真和志村跡



トリエ通信施設内発掘調査



鎖水原遺跡



伊佐上原遺跡群A地点・伊佐上原南遺跡



水中遺跡確認調査

発掘調査速報

令和4年度

沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

2022

令和3年度の調査成果をいち早く公開

令和4年 7/12(火) ▶ 8/28(日)

目次

ごあいさつ	1
令和3（2021）年度発掘調査 実施箇所位置図①	2
令和3（2021）年度発掘調査 実施箇所位置図②	4
伊佐上原遺跡群 A 地点・伊佐上原南遺跡	6
トリイ通信施設内発掘調査	10
大美御殿跡・首里旧真和志村跡	16
水中遺跡確認調査	22
鏡水原遺跡	28
県内出土遺物保存処理	32
沖縄歴史年表	36

【凡例】

1. 本図録は、沖縄県立埋蔵文化財センター企画展「発掘調査速報 2022」〈開催予定期間：令和4（2022）年7月12日～8月28日〉の展示を補完するものとして、編集・作成しました。
2. 展示会企画は、大城妃左緒が行いました。原稿執筆は、羽方誠・宮城淳一・玉城綾・亀島慎吾・田村薫が行いました。
3. 本誌編集は、並里千佳・山城英莉（補佐）が行いました。
4. 文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権（発行）者の承諾を得ずとも、本図録を複製して利用できます。ただし、利用にあたっては出典を明記してください。
5. 発掘調査報告書に記載されている資料名と、本図録に記載されている資料名が一部異なる場合があります。これは、新たな研究成果によって、詳細が判明したことによるものです。

ごあいさつ

沖縄県内には、貝塚、グスク、集落跡、近世墓などを含め約4,700カ所の遺跡が確認されています。沖縄県立埋蔵文化財センターでは、先人たちが残したこれらの埋蔵文化財の発掘調査を行い、考古学的見地から検証した成果を沖縄県の歴史・文化の解明や研究に役立てています。

通常、発掘調査が始まってから、土器や石器などの出土遺物を整理し、報告書を刊行するまでには数年の歳月を必要とします。そのため当センターでは、発掘調査で得られた最新の成果を、いち早く県民をはじめとする多くの方々に見ていただきたいとの思いから、前年度に実施した発掘調査の成果を展示公開する「発掘調査速報」展を毎年開催しています。

今年度は、首里高校で調査した「うふみうどうん 大美御殿跡・しゅりきゆうまわしむら 首里旧真和志村跡」や、「トリイ通信施設内発掘調査」、普天間飛行場内の「いさ 伊佐上原遺跡群A地点・いさういばるみなみ 伊佐上原南遺跡」、那覇空港近くの「かがんじばる 鏡水原遺跡」の発掘調査の成果や、「水中遺跡確認調査」の成果を出土遺物や写真パネルなどを通して紹介します。さらに、出土した金属製品や木製品などの保存処理の実施方法についても紹介します。

本展を通して、多くの方々が遺跡や遺物などに接し、沖縄の歴史と文化、先人たちの暮らしに想いを馳せるとともに、埋蔵文化財の価値やその重要性について理解を深める一助となれば幸いです。

令和4年7月12日

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 前田 直昭

令和3(2021)年度 発掘調査



トロイ遺跡跡地内出土の石棺

所在地 熊谷村宇原2562号地(トロイ遺跡跡地内)
時代 縄文時代後・晩期～近世・近代



熊谷遺跡跡地

所在地 熊谷村小原池水
時代 縄文時代 / 近世・近代



実施箇所位置図①



1. 1号発掘地
2. 2号発掘地
伊達上野原遺跡埋蔵文化層上層部跡地

所在地 釧路市中伊達 (遺跡発掘行場内)
時代 縄文時代 / ブスク時代 / 近世 - 近代



1. 1号発掘地 - 首長墓跡発掘跡地

所在地 釧路市首長町跡地 (遺跡発掘行場内)
時代 ブスク時代 - 近代

令和3(2021)年度 発掘調査

水中遺跡確認調査

令和3(2021)年度 実施箇所位置図



真興武【オーハ】南郷遺跡

所在地 久米島町

時代 グスク時代

久米島



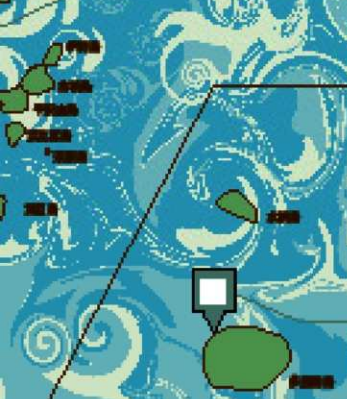
実施箇所位置図②



レッドビーチ沖の調査現場

所在地 東京都

調査時代 近代?



赤松島沖の調査現場

所在地 静岡県

調査時代 近代

伊佐上原遺跡群A地点・伊佐上原南遺跡

DATA

事業名	基地内文化財分布調査	所在地	宜野湾市伊佐（普天間飛行場内）
調査期間	令和3（2021）年9月～令和4（2022）年3月	時代	縄文時代/グスク時代/近世・近代
調査面積	291㎡		

はじめに

基地内文化財分布調査は、沖縄県内の米軍基地や自衛隊基地の中にどのような遺跡があるのかを把握することが目的で、平成9年度から実施しています。普天間飛行場内では、現在までに106か所の遺跡が確認されています。

今回の調査は、平成15(2003)年度に発見された伊佐上原遺跡群A地点（縄文時代・グスク時代）と、令和元(2019)年度に発見された伊佐上原南遺跡（近世・近代）について、より正確な範囲と性格を明らかにすることを目的としました。

発掘調査の結果、各時代の遺構や遺物を確認することができました。

【伊佐上原遺跡群A地点】の調査成果

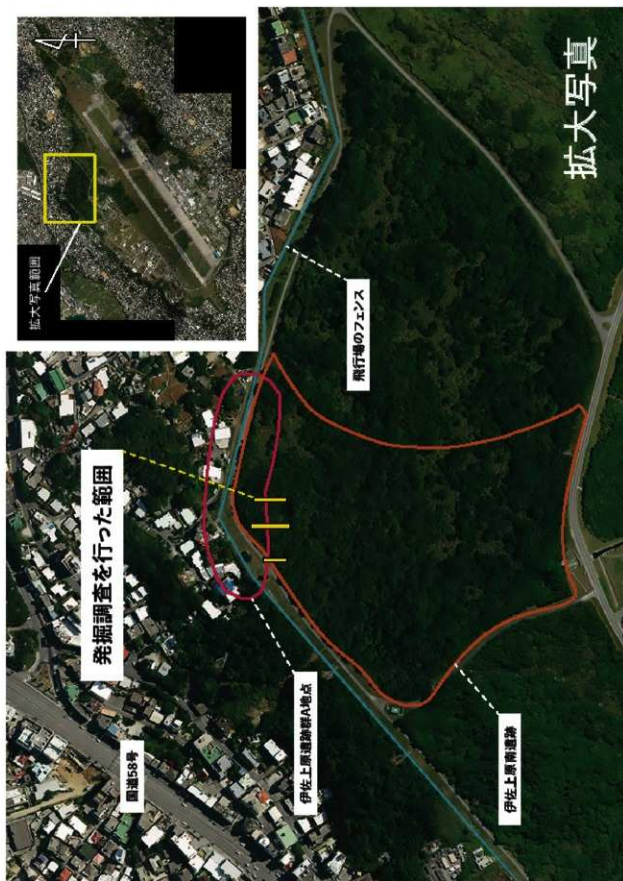
縄文時代 直径50cm～1mほどの穴が複数検出されました。穴の深さや用途は不明です。また、土器や石器などが出土しました。

グスク時代 直径30cm、深さ30cmほどの穴が複数検出されました。これらの中には、1mほどの間隔を置いて一列に並んでいる穴もあります。このほかにも、直径が80cmを超える穴も検出しました。また、滑石製石鍋や中国産陶磁器などが出土しました。

【伊佐上原南遺跡】の調査成果

近世・近代 区画のために作られた石列や、拳大の石が集中する用途不明の遺構が検出されました。

また、中国産や本土産、沖縄産の陶磁器などが出土しました。



普天間飛行場の写真



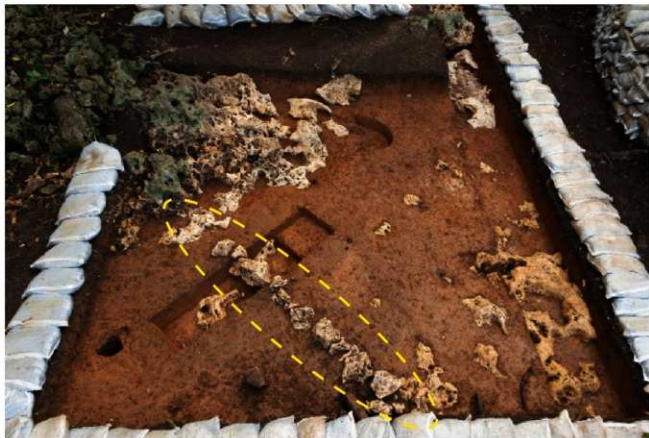
伊佐上原遺跡群 A 地点 縄文時代またはグスク時代の遺構



伊佐上原遺跡群 A 地点 グスク時代のピット群



伊佐上原南遺跡 近世・近代の遺構



伊佐上原南遺跡 近世・近代の石列

トリー通信施設内発掘調査

DATA

事業名	トリー通信施設内発掘調査	所在地	読谷村宇楚辺ほか（トリー通信施設内）
調査期間	令和3（2021）年8月～令和4（2022）年3月	時代	縄文時代後・晩期～近世・近代
調査面積	計 5,291 m ²	楚辺徳地原遺跡	(A: 405.1 m ² / E: 370.6 m ² / G: 465.7 m ²)
		楚辺親見原遺跡	(A: 2,306 m ²)
		波具知後原遺跡	(A: 367.5 m ²)
		大湾親見原遺跡	(A: 160.3 m ²)
		大湾糸蒲原遺跡	(A: 794.9 m ²)
		古堅通地原遺跡	(A: 331 m ²)

はじめに

読谷村に所在する米軍基地トリー通信施設内の施設等建設工事に伴い、現状のまま残すことができない埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査を令和元年度より実施しています。

令和3年度は、楚辺親見原遺跡Aおよび楚辺徳地原遺跡（A・E・G）、波具知後原遺跡A、大湾親見原遺跡A、大湾糸蒲原遺跡A、古堅通地原遺跡Aの発掘調査を行い、縄文時代後・晩期～近世・近代の遺構や遺物が出土しました。



各遺跡配置図

調査成果

縄文時代

縄文時代の遺構は、楚辺親見原遺跡 A で竪穴建物跡を確認しました。遺構の平面の形は隅丸方形形で、グスク時代以降の影響で上面やその一部は失われていましたが、土器や石器・石材を含む埋土や床面が確認できました。

また、遺構の周辺には迫地と呼ばれる小さな谷が確認でき、堆積層からは竪穴建物跡と同じ時期と考えられる土器と共に、石器や石材が出土していることから、当時の人々は迫地の周辺で生活していたと考えられます。

今回の調査で特徴的な遺構として、獣骨（イヌ）が集中して出土する縄文時代の竪穴建物跡があります。

この獣骨は 1 体分で、堆積の状況から、竪穴建物跡が使用されなくなった後に穴を掘り埋められたと考えられ、また、一部後世の影響を受けていますが骨の関節部分はつながった状態で出土したことから埋葬された可能性があります。

縄文時代の獣骨（イヌ）の埋葬の事例は県内では 2 例目であり、貴重な遺構であることから、読谷村と沖縄防衛局との調整により、現地に保存しています。

縄文時代遺物が堆積する迫地は、渡具知後原遺跡 A でも確認できました。迫地からは縄文時代と考えられる土器や石器、石材の破片が出土しましたが、迫地の周辺は、現代の基地造成や耕作の影響により削平されていたため、遺構は確認できませんでした。



楚辺親見原遺跡 A 完掘状況（黄：迫地、青：竪穴建物跡）



楚辺親見原遺跡 A 竪穴建物跡遺構検出状況



楚辺親見原遺跡 A 追地内包含層 遺物出土状況



楚辺親見原遺跡 A 竪穴建物跡 獣骨(イヌ)検出状況



楚辺親見原遺跡 A 竪穴建物跡 獣骨(イヌ)出土状況



渡具知後原遺跡 A 遺構検出状況 (黄：迫地)

グスク時代

グスク時代の遺構は、掘立柱建物跡や植栽痕、柵列遺構を確認しました。

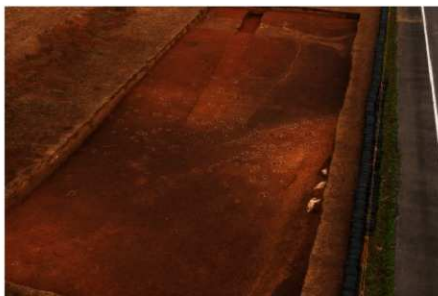
掘立柱建物は柱穴(ピット)を掘り、そこへ柱を立てて、建物の骨組みを作るため、ピットが方形、又は長方形に並んで確認できます。掘立柱建物はピットの数や規模により小型建物(4本柱、6本柱、9本柱)、それより大きな大型建物に分けることができます。

今回の調査では楚辺徳地原遺跡 A で6本柱の小型建物、古堅通地原遺跡 A や大湾親見原遺跡 A、大湾糸蒲原遺跡 A で大型建物を確認しました。

植栽痕は農耕に伴うと考えられる遺構で、浅いピットが規則的に複数列並ぶのが特徴です。

楚辺親見原遺跡では、迫地の周辺から植栽痕と考えられる遺構を確認しました。

楚辺徳地原遺跡 E では植栽痕に伴い、断面がV字のピットを確認しました。ピットは直線に並ぶ列が複数規則的に確認できたことから、区画等に利用された柵列遺構の可能性ががあります。



ふるげんつう に ぼる
古堅通地原遺跡 A III層掘削後 遺構検出状況 (南西より)



おおわんのあやみ ぼる
大湾親見原遺跡 A 遺構完掘状況 (西より)



おおわんのいとなま ぼる
大湾糸浦原遺跡 A 遺構完掘状況



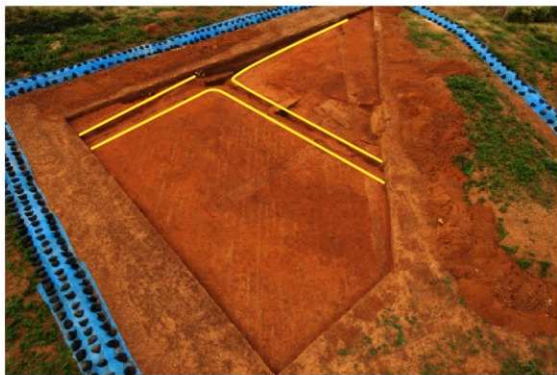
楚辺親見原遺跡 A 植栽痕 検出状況



楚辺徳地原遺跡 E 遺構検出状況

近世・近代

楚辺徳地原遺跡 G 及び古堅通地原遺跡では、区画及び排水に使用されたと考えられる溝状遺構を確認しました。遺構からは、本土産の陶磁器や沖縄産陶器などの遺物が出土する堆積層の上層より、戦後の基地造成に伴う遺物が出土していることから、戦前まで利用されていたと考えられます。



楚辺徳地原遺跡 G 調査区状況 (黄：溝状遺構)

まとめ

令和3年度の発掘調査では、基地造成や現代の耕作による影響が少なかったためか、多くの遺構や遺物を確認することができました。

トリイ通信施設内の記録保存調査は、令和3年度で終了しました。今後は、これまでの発掘調査の情報を整理し、その成果をまとめた発掘調査報告書を刊行する予定となっています。

大美御殿跡・首里旧真和志村跡

DATA

事業名	首里高校内埋蔵文化財発掘調査	所在地	那覇市首里真和志町（首里高校敷地内）
調査期間	Ⅷ区 令和3（2021）年7月～10月 その他 令和4（2022）年1月～4月	時代	グスク時代～近代
調査面積	Ⅷ区（280㎡） Ⅷ区 地中梁・基礎撤去後調査（218㎡） 旧普通教室棟周辺の試掘調査（186㎡） Ⅸ区（214㎡）		

はじめに

本事業は、首里高等学校（以下、首里高校）の校舎改築に伴い、平成25年度から行われている記録保存調査です。令和2年度に校舎建設が概ね終わり、残すは運動場を造るのみとなり、令和3年度実施箇所もその予定地にあたる場所（首里高校調査区図面参照）です。発掘調査は、改築工事の計画と連動していることから、工事が終わったら現場に乗り込むといったかたちで調査を進めていきました。

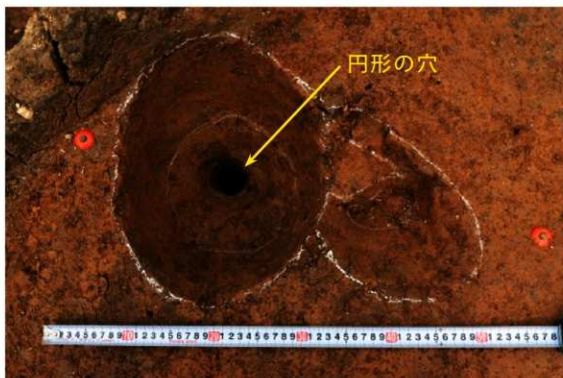
今回の調査は、旧管理特別棟の地中梁と基礎撤去後に実施し、梁の下に残っていた遺構を確認しました。また、旧普通教室棟とその周辺の試掘調査では、校舎建設によってほとんどが基盤層である岩盤まで削平されており、遺構は確認できませんでした。しかし、甲子園記念碑があった箇所のみ遺跡の包含層が確認されたため、調査区を拡張し、Ⅸ区として本調査へ移行していきました。他にもⅧ区の調査も実施しています。



列状に並ぶ柱穴

【大美御殿跡】の調査成果

当時の生活面や土坑、柱穴が確認されました。特に柱穴が列状に並ぶものが確認されました。その柱跡の多くが直径約60cmの穴の中心に直径8～5cm程度の円錐状柱痕があり、完掘してみると円形の穴が更に深くあくものと、底の部分に楕円の溝ができていたものがありました。



柱穴1完掘状況



柱穴2完掘状況

【首里旧真和志村跡】の調査成果

グスク時代と考えられる埋土に、炭を多く含んだ深い土坑や溝などが確認されています。グスク時代は複数の層からなっており、その層毎で遺構が確認できます。

また、大美御殿より古いと考えられる石敷きも確認されました。地山まで掘削し造成した後に、2つの石列と拳大の石を敷き詰めています。校舎の基礎によって破壊されていたため、小さな範囲でしか残っていませんでした。



石敷き

【県立第一中学校】の調査成果

敷地の南側（安国寺側）で、首里高校の前身である、県立第一中学校時代の井戸が確認されました。

学校整備の段階にコンクリートで蓋がされており、校舎建設の際に破壊されていましたが、石の大きさが近世のものに比べると大きかったことや、掘削時にコンクリートの井戸枠が出土したことから、この時期のものだと判断しました。

遺構の保護

首里高校内の発掘調査では、可能な限り遺構を残すように、校舎建設の際に調整を行っています。ほとんどの遺構は、記録保存調査として完掘してしまっていますが、遺跡を評価する上で残したほうが良いと判断したものは、白砂を入れて埋め戻しています。白砂を敷き詰めることによって、工事で掘削した際の目印となります。



県立第一中学校の井戸



白砂を敷く

まとめ

令和3年度実施の調査箇所は、元々の地形が高い部分であったこともあり、後世の工事によってほとんどが破壊されていました。

しかし、校舎の基礎や梁の隙間には遺構が残っており、狭い範囲のなかではありますが、近世の建物の様子がわかるような柱跡が確認されました。

そして、グスク時代からこの地で、人々が生活していたということを再確認することができました。

工事立ち会い

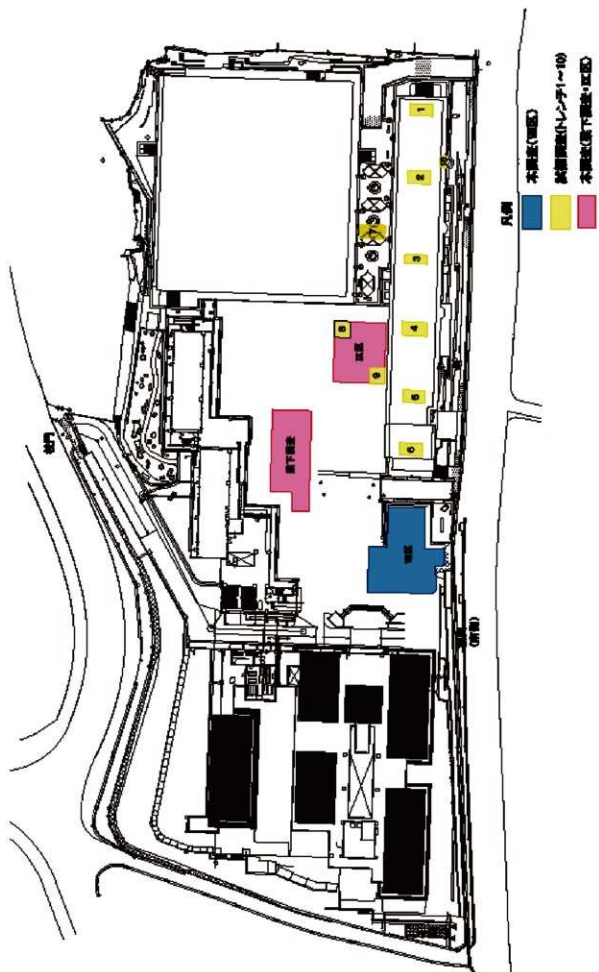
首里高校では遺構を可能な限り残すということで、改築工事が実施される際には、綿密な調整を行いながら進めてきています。

令和3年度は、発掘調査のほかにも、旧校舎の基礎解体工事が行われており、残している遺構が近接していたことから、工事に立ち会いました。

工事現場でその都度、重機のオペレーターと相談をしながら掘削・解体を行っていただきましたので、通常の工事よりも気を遣って作業をしていただきました。そのご協力もあり、遺構を残すことができました。



工事立ち会い



首里高校調査区図面

水中遺跡確認調査

DATA

事業名	県内遺跡発掘調査等（水中遺跡確認）	所在地	金武町 久米島町 多良間村
調査期間	令和3（2021）年7月～令和4（2022）年3月	時代	古く時代/近世・近代
調査面積	_____		

はじめに

沖縄県内では各地で水中遺跡が確認され、平成21(2009)年度までに143か所見つかっており、現在も新しい遺跡がどんどん見つかっています。当センターでは、令和元年度から県内各地で実際に海に潜って調査を実施しています。また、水中遺跡がある海域の地形情報を得るため、海底地形測量を実施しています。

これらの水中遺跡の調査は、県内の水中遺跡をどのように保護し、活用していくかを考えるための基礎資料作成を目的として実施しています。

県内で見ついている水中遺跡の種類や確認調査の方法については、『令和3年度発掘調査速報2021』で紹介していますので、図録等をあわせてご覧ください。

令和3(2021)年度の調査

令和3年度は、【レッドビーチ沖^{かんづら}沖^{かんづら}木杭橋遺構^{きかたせき}】（金武町）、【東奥武[オーハ]海底遺跡^{かきせき}】（久米島町）で潜水調査を行いました。また、【高田海岸沖^{たかたがは}海底遺跡^{かきせき}】（多良間村）では海底地形測量を実施しました。

【レッドビーチ沖^{かんづら}木杭橋遺構^{きかたせき}】（金武町） 時代：近代？

金武町のレッドビーチ沖に木杭橋跡があります。木杭橋といっても、現在は木杭橋に利用された木杭が海中に残っているのみで、陸上から確認することは難しい状況です（写真1）。



写真1 レッドビーチ遠景（矢印部分は木杭がある部分）



写真2 密集して打ち込まれた木杭



写真3 ほぼ方形に配置するよう打ち込まれた木杭

今回の調査では、この海域に棧橋の木杭がどれくらい残っているのか調査を行い、木杭がある場所を記録しました。調査の結果、50本までの木杭を確認することが出来ましたが、調査の都合上、記録を行えなかった木杭もありました。この海域にはまだ多くの木杭が残されていることがわかったので、今後も継続して調査を行う必要があります。

木杭は周長が約60cmから約100cmまでのものがあり、木杭に用いられた木材の太さがそれぞれ異なることがわかりました。密集して打ち込まれている部分（写真2）や、方形に配置するように打ち込まれている部分もありました（写真3）。沖側では、木杭が密集している部分が10m毎に5か所あることがわかりました（図1）。海岸から続いている棧橋が東西に伸び、船を係留していた様子が想像できます。

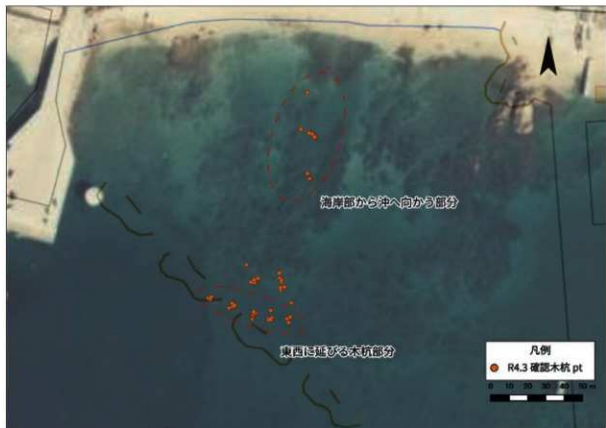


図1 確認された木杭の位置
国土地理院タイル「電子国土基本図（オルソ画像）」にGPS記録等をQGISで追加。

【東奥武[オーハ]海底遺跡】(久米島町) 時代：グスク時代

久米島の東側、東奥武[オーハ]島の東側と南側の海岸から海底に遺跡があり、これまでに数多くの中国産陶磁器が見つかっています(写真4)。

令和2年度には、海底地形測量を実施してこの海域の地形情報を取得しました。令和3年度は、遺跡の範囲や海底に広がる遺物の内容を確認するため、株式会社文化財サービスの協力を得ながら、潜水調査を行いました(写真5)。

海底には、中国産青磁を中心に様々な遺物を確認することができ(写真6)、発見例のない馬上杯じょうさばいも確認しました(写真7)。

遺物を確認したら、遺物の種類や計測を行い、記録します(写真8)。その際、GPSで位置の記録も行います。このような調査を経て、次のことがわかってきました(図2)。



写真4 東奥武[オーハ]海底遺跡東側 遠景



写真5 潜水調査の様子



写真6 遺物の散布状況



写真7 発見した馬上杯じょうさばい



写真8 遺物の観察記録

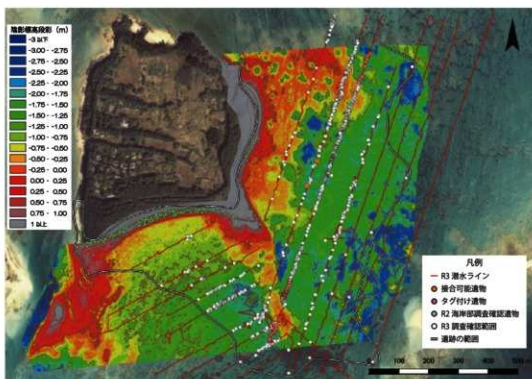


図2 東奥武「オーハ」海底遺跡で確認した遺物
 国土地理院タイル「電子国土基本図(オルソ画像)」にGPS記録等をQGISで追加。
 海底地形測量図・段彩図：株式会社バスコに作成委託。

- 遺跡の西、南、東端部分が判明し、遺跡の範囲が概ね判明しました。
- 遺跡の範囲内でも、より遺物が集中している部分が確認出来ました。
- 確認した遺物のなかで、接合可能な資料がありました。海の中で割れた遺物がどのように広がっていくかを知ることが出来る重要な発見です。

海底にある陶磁器は、潮流や波の影響によって割れることもあれば、元の位置から動いてしまい、どこに動いたかわからなくなることが多々あります。

このようにどんどん動いていく遺物の動きを調べるため、久米島博物館の協力を得ながら、68点の遺物にタグ付け作業を行いました(写真9・10)。

何年かに数回、遺物の動きを観察し、その動向を把握しようと考えています。

今回のような試みは、水中遺跡の経過観察を行うために重要なことで、どのように遺跡を守っていくか考えるヒントになります。

今後も調査を続けながら見守っていく必要があります。



写真9 タグ付けの様子
 写っているのは久米島博物館職員



写真10 タグ付けした遺物

【高田海岸沖海底遺跡】（多良間村） 時代：近世

1857年にオランダ商船ファンボッセ号が座礁・沈没し、その積荷が確認されています。水中遺跡のなかでは県内唯一の史跡で、「オランダ商船遭難の地」として多良間村指定史跡となっています（写真11）。

高田海岸沖海底遺跡はこれまでに、多良間村教育委員会と九州国立博物館によって、海底地形測量や潜水調査などが行われ、その成果が報告されています。

令和3年度は、水深が浅く、海底地形測量を実施していない範囲の測量を行いました。また、多良間村教育委員会と九州国立博物館からデータ提供をいただき、深い海域と浅い海域の測量図を合わせた海底地形図の作成を行いました（図3）。

海底地形測量に加え、海岸部に落ちている遺物を調査する踏査を行いました（写真12）。

今後は作成した海底地形図をもとにしながら、潜水調査や海岸部の踏査を行い、船が座礁・沈没し、積荷がどのように海中にひろがるのかということや、このような遺跡をどのように保護していけばよいのか検討しています。



写真11 高田海岸沖海底遺跡 遠景



写真12 海岸踏査の様子

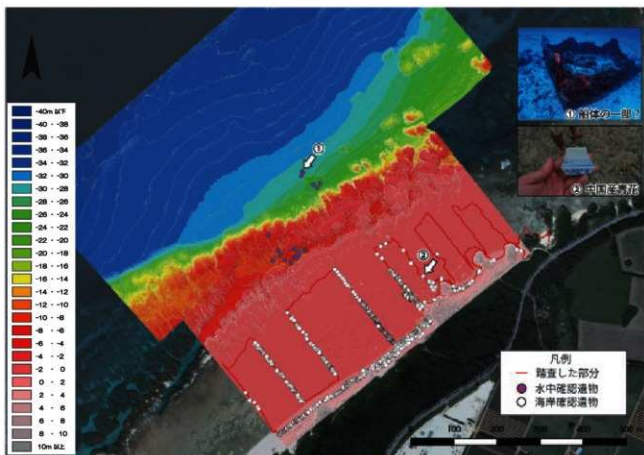


図3 高田海岸沖海底遺跡で確認した遺物

国土地理院タイル「電子国土基本図(オルソ画像)」にGPS記録等をQGISで追加。
海底地形測量図・段彩図：株式会社パスコに作成委託。九州国立博物館作成図面と合成

まとめ

県内での水中遺跡の調査は、現在も様々な組織により、積極的に行われています。

海底にある遺跡の場所の周知を行うとともに、遺跡の内容を研究し、後世に伝えていくための方法を模索しています。このような取り組みは県内のみならず、世界中で行われており、全世界的な取り組みのひとつでもあります。

私たちは目の前に広がる海を利用し、様々な恵みを得て暮らしてきました。

そのことを物語る水中遺跡は、陸上の遺跡と同様、未来へ継承していかなければならない大切なものです。

あが んじ ばら 鏡水原遺跡

DATA

事業名	令和3年度小禄道路（鏡水原遺跡）埋蔵文化財発掘調査業務	所在地	那覇市小禄鏡水
調査期間	令和3（2021）年10月～令和4（2022）年1月	時代	縄文時代/近世・近代
調査面積	650㎡		

はじめに

那覇空港自動車道（小禄道路）の建設によって、やむを得ず破壊されてしまう埋蔵文化財を写真や図面などの記録として保存するための発掘調査を行っています。

令和3（2021）年度は、那覇空港のすぐ近くにある鏡水原遺跡を調査しました。調査区付近は、戦前は鏡水集落の畑が広がっていましたが、戦時中から戦後にかけて行われた土地の造成で畑や道の一部が削られ、なくなってしまいました。しかし、比較的標高の低い土地は造成の影響を受けずに残っており、そこから畑の側の道に関連する遺構などが見つかりました。また、一部からは縄文時代の土器や石器も見つかっています。

調査成果

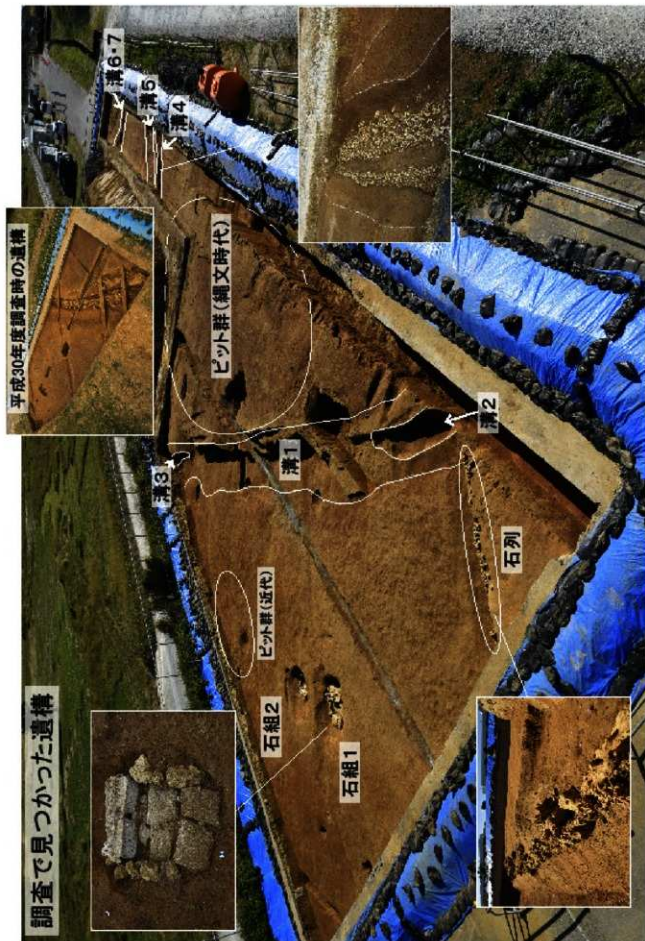
縄文時代 調査区の一部からは、縄文時代の土器や石器を含む包含層の堆積も見つかりました。

遺物の出土がまばらなことから、調査区の近くに遺跡の本体があり、そこから流れ込んできたものかもしれません。

同じ時期に掘られた穴もいくつか見つかりましたが、建物の跡のように並ぶものではなく、用途は不明です。

近世～近代 地山を掘りこんで作られた溝や石の列が、直角に並んでいる様子が見られました。周辺の土地を四角く区切るものと思われます。戦前の航空写真にも、同じような位置で、畑が区切られている様子が写されています。

溝の他に、用途不明の石組などが見つかっており、何のために作られたものなのか、これから検討していく予定です。



石組

地山の上に石を積み重ね作られた遺構で、調査区内で並んで2基見つかりました。どちらも石の上からモルタルで固められ、水が漏れづらい構造になっていました。

石組2は拵のように四角に囲う単純な構造になっていますが、石組1は中央付近に穴が空いていて、棒などを差し込めるような構造になっています。詳細は不明ですが、戦前の航空写真では石組みを中心に円形の跡が広がっている様子がみられます。もしかしたら、サトウキビを絞るサーターヤーなどの施設があったかもしれません。



石組1 (穴正面)



石組1 (穴断面)

溝

調査区のあちこちで溝が掘られている様子が見られました。深さはまちまちで、浅いものは数cm、深いもので1mを超えるものがあります。

主に耕作地を区切るために作られたものと思われませんが、後から埋められ、道として作り直された可能性があるものもありました。戦後の造成で壊れているものが多いですが、一部の標高が低い所のものは残っていました。



溝4断面

縄文時代の遺構

調査区の一部には、縄文時代の層が堆積していて、その中から穴が多く見つかりました。

しかし、この穴が何かの形になるような様子は見られなかったため、何のためにあけられた穴なのか、判別はついていません。



縄文時代のピット群

調査区周辺の土地の移り変わり

昭和 19 (1944) 年頃



昭和 52 (1977) 年頃



平成 30 (2018) 年頃



県内出土遺物 保存処理

1 事業の目的

沖縄県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行って出土した遺物の中には、金属製品や木製品、石造物などの時間とともに劣化していく材質のものが含まれます。この事業は、これらの遺物について長期的な保存や公開等に活用するため、保存処理を行っていく事業です。

2 木製品の保存処理

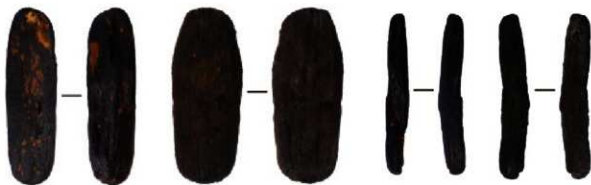
発掘調査では、まれに遺跡から木製品が出土することがあります。近年、伊藤幸司氏らを中心に、糖類であるトレハロースを用いた木製品保存処理方法について研究が深められ、従来の処理方法より、安価で安全・短期間で保存処理を行える方法として注目されています。

2-1 野国貝塚出土の木製品保存処理

令和3（2021）年度は、野国貝塚出土の木製品50点の保存処理委託を実施しました。

資料は、野国貝塚B地点の昭和55・56（1980・1981）年度調査と、平成元（1989）年度調査で縄文時代前期（約6500年前）の爪形文土器を含む混礫土層から出土した木製品・木片・木の実（アダン）を対象としました。

資料は水漬けの状態 で保管され、著しく劣化した状態 となっていました。そのため、早急に保存処理を行う必要があり、専門とする業者に委託しました。保存処理を行ったことで、劣化への耐久性が増し、長期的な保存や積極的な活用ができるようになりました。



板状製品（左：処理前、右：処理後）



棒状製品（上：処理前、下：処理後）



木片（処理後）



木の实（処理後）

2-2 渡地村跡出土の木製品保存処理

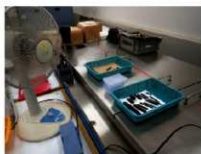
前年度に引き続き、令和3（2021）年度も、渡地村跡から出土した木製品を対象に、トレハロースを用いた木製品の保存処理を、当センターで実施しました。

保存処理後の状況としては、遺物は全体形状を保っており、表面は木材の質感を保持しており状態は安定しています。今後も当センターでは、木製品の保存活用に向け、トレハロース法について検討していく予定です。

◆木製品トレハロース保存処理工程◆



①トレハロース含浸処理



②乾燥状況



③結晶化の状況



④表面処理作業



⑤表面処理作業



⑥保存処理後木製品

3 金属製品の保存処理

金属製品の簡易保存処理も継続的に実施しており、調査によって出土した金属製品は、錆の進行を防ぐために、空気・水を通さない特殊な袋に無酸素状態で密封して保管しています（三菱ガス化学：RPシステム）。



金属製品RP処理作業風景



RP処理された金属製品

発掘調査のきっかけ（契機）とは

一概に発掘調査といっても、そのきっかけ（契機）や原因がいくつかあります。そもそも、遺跡などの発掘調査は考古学的手法を用いておこなうわけですが、それによって過去の人たちの生活や行動を復元し、当時の歴史や文化を明らかにしていくことを目的としています。

発掘調査は、大きく「学術調査」と「行政調査」のふたつに分けることができます。「学術調査」とは、大学の考古学研究室などの研究機関がおこなう発掘調査で、学術的な目的意識（研究テーマ）を持って取り組まれます。

一方、「行政調査」とは、行政機関（教育委員会など）がおこなう発掘調査で、その契機や原因によって大きく3つに分けることができます。

まず、遺跡（埋蔵文化財）の適切な保護を目的とし、その所在・内容等を把握するための調査があります。

次に、保存・活用のための発掘調査があります。重要な遺跡の評価をおこなうための調査や、史跡指定された遺跡の整備・活用のために行われる調査も含まれます。

最後に、記録保存のための調査があります。この調査は、開発側との調整によって、現地保存ができなくなる遺跡について、開発に先立ち発掘調査をおこなうものです。この調査によって得られた記録類は、消滅した遺跡に代わって、遺跡の内容を後世に伝えるものとなります。

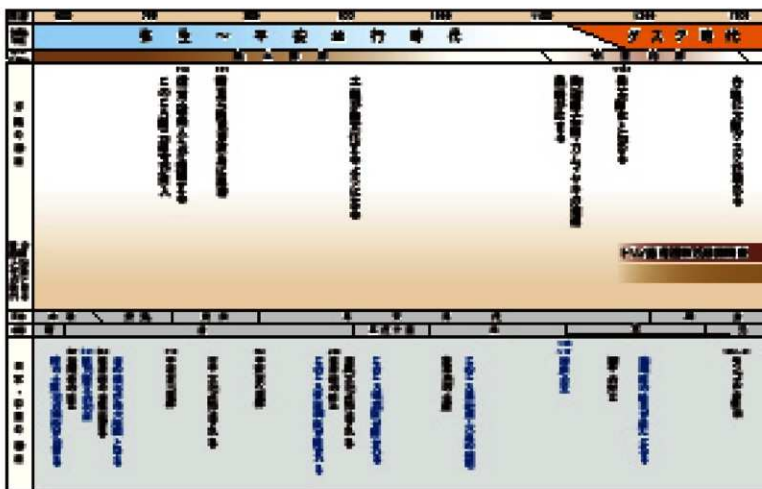
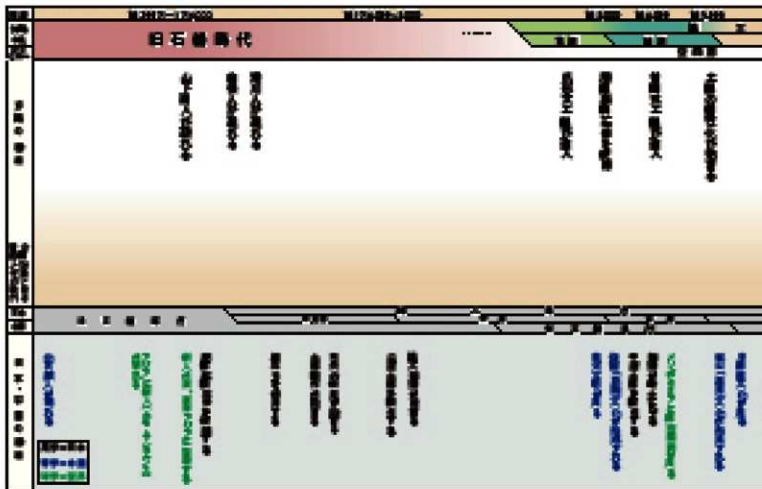
このように、発掘調査にも様々なケースがありますが、いずれの場合も遺跡にメスを入れることには変わりありません。発掘調査がおこなわれた遺跡は二度と元に戻らないわけですから、より慎重な発掘調査をおこなう必要があります。

現在、県内では当センターや市町村教育委員会、大学の考古学研究室などが実施している発掘調査が毎年数十件ありますので、機会があれば発掘調査現場に足を運んでみてください。

県内の発掘調査情報に関しては発掘調査を実施している市町村教育委員会、もしくは以下にお問い合わせください。

- 沖縄県教育庁文化財課 記念物班 埋蔵文化財担当 TEL 098-866-2731
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 TEL 098-835-8752

沖縄歴史年表



文化講座

日時：令和4年8月7日（日）13:30～16:00（受付13:00）

テーマ：第90回文化講座「発掘調査速報2022」

会場：当センター研修室 講師：当センター専門員

受講料：無料 定員：66名 ※予約制

予約受付

日時：7月19日（火）～28日（木）9:00～17:00

予約方法：電話での受付のみとなっております。

☎098-835-8752（調査班 普及担当）

発掘調査速報 2022

令和4年度

沖縄県立埋蔵文化財センター企画展

2022

沖縄県立埋蔵文化財センター

休所日 月曜日（国民の休日・慰霊の日場合は振替）
国民の休日（こどもの日・文化の日を除く） 年末年始（12/28～1/4）
慰霊の日（6/23） ※その他臨時休所あり

開所時間 9:00～17:00（入所は16:30まで）

住所 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

電話番号 ☎098-835-8752/8751



新型コロナウイルス感染予防に
ご協力お願いします。
詳細は当センターホームページで。

🔍 沖縄県 まいぶんセンター